

世界 17 ヶ国 17 名の研修員(JICA 集団研修)が仙台塩釜港を視察

塩釜港湾・空港整備事務所

1. 目的・概要

平成 24 年 10 月 11 日から 11 月 16 日の約 1 ヶ月の間、ミャンマー、スリランカ、ベトナム、エジプト等の国々(17 ヶ国)の 17 名の方々が、港湾運営等に関する研修を行っています。この研修は、発展途上国の管理運営分野で中核となる幹部職員を対象として、我が国における港湾開発と管理運営手法等を伝え、研修の成果をそれぞれの国の港湾政策に反映させ、経済・社会の発展に寄与すること、および、我が国との友好関係の推進を図ることを目的として実施されるものです。

この研修の一環として、11 月 8～9 日にかけて東日本大震災により被災した仙台塩釜港(仙台港区、塩釜港区、石巻港区)を視察し、被災状況と復旧・復興の取り組みを学んでいただきました。

2. 現地研修の様子

8 日(木)午後、当事務所会議室において仙台港区を襲った津波の映像を視聴した後、当事務所所長から、仙台塩釜港の被災・復旧状況や、津波によって改変した松島湾の海洋環境復興への取り組み状況などを説明しました。研修員からは津波被害に対する住民への支援や放射能汚染の状況、構造物の構造など、幅広い内容の質疑が繰り広げられました。

その後、震災からいち早く復旧し、活発な利用となっている仙台港区にバスで移動しました。道中、車窓から見える風景が直前に見た津波映像と同じ場所か?と驚きながらも、津波で流された蒲生地区の民家跡など、生々しい爪痕も見えてきます。仙台港区では高砂コンテナターミナルの復旧状況や、中野地区岸壁の復旧や新しい埠頭の建設の状況などを視察し、夕暮れ前にはマリゲート塩釜へ到着しました。徐々に肌寒くなるマリゲート塩釜の屋上において、仙台港区と塩釜港区の役割の違いや、港湾計画、施設配置等を説明すると、ここでも利用船舶と港湾施設との関係や、機能分担の考え方等、様々な質問が飛び交い、言葉は分からずとも参加者の熱心さが伝わってきます。

最後は記念に“Say cheese”です。



概要説明の状況。於：事務所会議室



Say cheese。於：マリゲート塩釜

翌9日（金）午前には、石巻市日和山公園から眼下に広がる津波被害の状況を視察後、石巻ブロックのガレキ処理施設を視察しました。施設を管理運営する宮城県担当者から概要説明を受けたあと、ベルトコンベア上を流れるガレキを人の手で選別する作業や、可燃物と復旧工事の材料となる骨材（洗い砂等）への分別作業を視察して頂きました。

その後、隣接する石巻港区雲雀野地区中央ふ頭において、岸壁（水深 13m）の嵩上工事の状況を視察。この日は、冷たい風が吹き海上は荒れ模様で、未だ着工前の2号岸壁からは水しぶきが上がっていて、嵩上げが完了した1号岸壁との安全性の違いが一目瞭然です。



ガレキ処理施設視察 於：石巻ブロック処理施設



嵩上げされた雲雀野1号岸壁(水深13m)



未着工の2号岸壁では“しぶき”があがっている

3. 研修員からの感想

() 内は出身国

- ・日本の早い回復力には驚いた。日本はベトナムにとって貿易・経済でも重要な国。港の復旧によってベトナムとの貿易も円滑に進むと期待している。(ベトナム)
- ・高砂コンテナターミナルの復旧技術は大変勉強になった。技術大国の日本は、復旧にも様々な工夫が凝らされていることを実感。(東ティモール)
- ・地震、津波の恐ろしさを知った。近隣のニカラグアでは地震があるが、中米では津波の経験はなく、津波によってインフラが大きな被害を受けること、その対策の重要性を認識した。(パナマ)
- ・災害廃棄物の処理の速さと、処理土のリサイクル、復興事業への活用が大変興味深かった。(ミャンマー)
- ・迅速な復旧に感心した。インドネシアではアチェの津波被害からの復旧・復興に時間がかかっている。日本の技術力、資材、人材、工夫とインドネシアと比較すると大変恵まれた環境だが、今回現場を見て学び、少しでも自分の国の復興に役立てたいと思う(インドネシア)

4. おわりに

今回の研修を通じて震災からの復旧をどの様に進めていったのか、津波被害を最小限に抑えるにはどうすればよいのか等、学んでいただけたものと思います。

少しでも、参加各国の発展に、お役にたてれば幸いです。